

～府内フリースクールの取り組み～

# 子どもに多様な居場所を

「フリースクール」をご存じですか？  
不登校で学校へ行くことが難しい子ども  
の居場所として提供され、その規模や  
活動内容は多種多様で全国で約500カ  
所を数えます。  
今回は、府内でフリースク  
ルを運営する2団体の取り組  
みを紹介します。



**フリースクール**  
一般に、不登校の子どもに対  
し、学習活動、教育相談、体験活  
動などの活動を行っている民間  
の施設（文部科学省HPより）



●自分らしい過ごし方を

はらいふは、不登校の10代が安心し  
て学び、自分らしく過ごせる場所とし  
て、高槻市原地区で活動している団体  
です。

代表理事の木脇 嶺さんは、学生の居  
場所づくり・不登校支援などの教育事  
業に従事した経験から「学校に通えな  
い子にこそ居場所が必要」と感じ、平  
成30年6月に立ちあげました。

子どもは、お菓子作り・楽器の練習な  
ど、自由に時間を過ごします。古民家を  
改装した敷地内にはハンモックやピザ窯  
があり、活動の選択肢を増やすことで自  
己決定をサポートします。

●子どもの思いを大切に

活動に参加するボランティア  
アは子どもの考えを大切に  
しながら同じ時間を過ごし、  
子どもの主体性を育みます。

教員をめざす大学生は、  
「子どもに関わる経験を将来  
に生かしたい」とボランティアをほ  
めました。活動していくうちに、同じ状  
況の子どもはいないことに気づき、遊  
び相手になる、後ろから見守るなど、一  
人ひとりに合わせた向き合い方を模索。  
「子どもの変化に気づいた時にやりが  
いを感じ、楽しいから続けられます」と  
話します。

●子ども時代を楽しんで

フリースクールに公的資金の投入はな  
く、利用料は家庭の負担になります。寄付



自由に時間を過ごします(フリースクールはらいふ)



●「ココまな」ならではの場所を

ココまなは、市内の一軒家を拠点に  
小中高生を対象に令和3年4月から週  
に2回、平日の昼間に活動しています。  
代表の土居 侘美さんは、中学校教員  
をしていました。生徒と過ごすなかで、  
子どもが学校以外の選択肢として「コ  
コまな」を選んだことと安心できる場所  
の必要性を強く感じ、団体を立ちあげ  
ました。

●金言言葉は「無理をしなご」

子どもは、無理をして活動に参加す  
る必要はありません。

「人によって学びの形は違う」との考  
えから、裁縫や段ボール工作、映画鑑賞  
など自分のやりたいことをして自由  
過ごします。

ボランティアも、スタッフということ  
を意識しすぎず、参加者のように過ご  
すことを心がけながら、材料調達や話  
し相手など、多岐にわたって活動をサ  
ポート。

自身の不登校経験から、子どもの居  
場所に課題意識をもち、運営面にも携  
わるボランティアもいます。

## ボランティア OSAKA

●地域一体となって

イベント開催時には市の社会福祉協  
議会をはじめ、地区福祉委員会などの  
関係機関から、イベント費用の提供や  
会場の貸し出しなどの協力があり、地  
域一体となって活動しています。また、  
オリジナルグッズの販売など、新たな取  
り組みを日々検討しています。

「子どもが楽しそうに過ごす姿を見  
ると力が湧いてきます」と話す土居さ



ココまな  
活動のようすは  
こちらから



ボードゲームに夢中！（フリースクールココまな）

ん。子どもの笑顔を原動力に前進する  
ココまなの挑戦に、期待が膨らみます。



令和2年12月には、不登校の子ども  
を取り巻く社会環境をより良いものに  
変えるため、大阪府フリースクール等  
ネットワークが結成されています。

府内のフリースクールをはじめとす  
る民間団体が学校や行政機関と連携す  
ることで、地域一体型の支援体制の構  
築を図り、すべての子どもの教育機会  
の確保をめざしています。

●復帰ではなく自立

子ども一人ひとりに向き合った柔軟  
な活動は、フリースクールの強みです。

一方、利用料の経済的負担や、フリー  
スクールの数が少なく地域に通える場  
所がないなどの課題があります。

文科科学省によると、不登校児童生徒  
への支援の基本的な指針は「学校に復帰  
すること」ではなく、「社会的な自立を  
めざすこと」に変化しています。

今後、子どもが自分に合った環境で  
自分らしく過ごせる第3の居場所とし  
てフリースクールの活動が広がること  
が望まれます。

地域で活躍する

### 民生委員・ 児童委員さん

NO.39



よく聞いて  
しと見守り  
河南町  
奥野富美子さん  
(民生委員歴13年)

このコラムは、地域で活躍する民生委員・  
児童委員(以下、民生委員)さんにスポット  
を当て、その方の思いを紹介します。  
今回は、地域住民一人ひとりを気遣い、  
声かけや見守りを行う奥野さんにインタ  
ビュー。活動で大切にしていること、今後  
の抱負について聞きました。

●話をよく聞いて打ちとける

中学校の教師を定年より早く退職した  
後、民生委員の話をいただきました。この町  
は結婚してから住みはじめたため、地域と  
の関わりが少ない状況でした。就任後は、  
見守りリストに載っている世帯に訪問する  
機会を増やして共通の話題で打ちとけ、顔  
を覚えてもらえるよう努めました。

今では地域の方から声をかけてくれる  
ことが何よりうれしいです。守秘義務を守り、  
安心して相談してもらえるように心が  
けて活動しています。

●地域力を生かしてそっと見守る

一方で家族の問題を周囲に相談したく  
ない家庭も多く、関係づくりや見守り方に

悩んでいました。障がいのある方を家族で  
ケアしているケースでは、回覧板をきっか  
けに地域住民と協力し、家族のキーパー  
ソンと“気軽に話せる相手”としての関係づ  
くりを行い、地域全体で見守っていきけるよ  
う活動しています。

また、認知症の方がいる家庭では、見  
守っているうちに介護が必要な状況に気  
づき、関係機関と現状を共有。デイサービ  
スなど適切な支援へつなげることができ  
ました。

●必要だから行動する

コロナ禍以降、スクールバスに乗る子ど  
もたちの見守りをはじめました。きっかけ  
は、分散登校で見送りができない子どもがひと  
りでバス停に来る姿に心配になったから。  
必要と感じたら、迅速に行動するように  
しています。

河南町は高齢化が進んでおり、特にひ  
と暮らし高齢者の割合が高くなっていま  
す。これからも、誰もが暮らしやすい地域  
にするため、声かけや訪問をさらに積極的  
に行っていきたいです。